



風歌 2



森下淳一

リラの花をさがして

リラの花をさがして
並木通りから
みゆき通り
晴海通りから
昭和通り
リラの花は見つからず
四月の暖かい陽差しが
若葉を照らす
人と若葉の影が解け合い
空気がガラス玉のように転がっていく
リラの花は見つからず
かわりにジャスミンの花を持ち帰る
もうすぐ誕生日の君のために

もう一度

花が散り
川に流れていくように
僕の心も変わっていくのだろうか
燃えるような青葉が
やがて秋風とともに色を失い
大地に落ちて腐っていくように
僕の心もやがて醒めていくのだろうか
君を好きだったあの頃がとても懐かしい
冬なのに心に暖かい光を信じていた
あの二月の寒い頃
今 まぶしい新緑の季節
なのに心に冷たい風が吹く
君がもう一度
僕の心に暖かい光を差してくれるなら
今でもきっと僕は心の奴隷になって
君を愛してしまうにちがいない

のら猫

毎日 毎日 僕の帰りを待って
アパートのドアの前で座っているけど
たまにはしっぽをふって
「ニャア」とお帰りなさいと鳴いたら
僕がえさをくれるかどうか
疑いの眼差し
えさをやらないと
うらめしそうな眼差し
無口なお前なんか好きになれないよ
それでもコンビニで
カンヅメを買ってやると
その太った毛むくじゃらの体を
僕に押し付けてくる
のみうつすなよ
どうせえさを食べたなら
どこかへ行ってしまおうくせに
毎日 毎日 僕の帰りを待っているのら猫
たまにお前の姿が見えない時は
ちょっとさみしい

蝉

七年間も暗い地面の下にいて
やっところさ地上に出たら暑い太陽の季節
なぜ 春の桜咲く季節に出てこないの？
なぜ 秋の金木犀の咲く季節に出てこないの？
桜のやさしい色を知らず
金木犀のやさしい匂いを知らず
ひまわりの咲く地上に出て飛び立っていく
ほんの数週間
恋をするためだけに

紫陽花

海をすくえば紫陽花になる
雨に濡れたら海になる
海よ 海
遠く離れた都会の中で
紫陽花に姿を変えて美しい
陽よ 照るな
紫陽花の海が消えるから
雨よ やさしく降れ
海の心に触れたいから
花に触らないで
海の色が流れるから
紫陽花は無口
雨に海の色溶かし
ただ静かに咲いている

波

陽だまりの中を
人々が黙って歩いていく
それはまるで
波のような歩み
人の心もまた波のよう
寄せては引いて
引いては寄せる
波に洗われて
砂が丸くなるように
愛に洗われて
心も丸くなればいいのに
寄せては引いて
引いては寄せる
君への愛もまた同じ
月夜の海の波のよう

君が星になるなら

君が星になるなら
僕も星になる
星の君のまわりを
永遠に回り続ける
小さな星に

君が風になるなら
僕は鳥になって
風の君を翼いっぱいを受け
セルリアンブルーの空に舞い上がる
風の君がなくなったら
僕は地上に落ちて
つぶれてしまうだろう

君が海になるなら
僕は君の海に深く潜っていく
君の心の海
僕の心が溶けるまで
いつまでも潜っていく

君がこの地球の星に
いなくなったら
僕は確実に
生きていけない

僕の心は君の心の掌の中
苦しみも悲しみも
喜びも切なさも
愛おしさも
すべて君が連れてくる

ずっと心に繋いでいる
君への愛は
もうどこにも飛んではいかない

昔 僕の祖先は何だったのだろう

今生きている人間は
長ーい長ーい生殖の継続で生まれてきた
僕の祖先は誰だったのだろう
百年前は確かに田舎の山奥で
小さな田畑を耕していたお百姓さん
でも五百年前は分からない
どんな顔をして どんな生活をしていたのか
農夫だったのか 漁師だったのか 木こりだったのか
どんな人生を生きていたのか
千年前はもっと分からない
もしかしたら外国から船で渡って来たのかもしれない
二千 三千 四千年前
確かに今の僕を造った祖先は生きていた
弥生 縄文 石器時代
僕の祖先は誰だったのだろう
そして遠ーく恐竜時代
僕の祖先は何だったのだろう
まさかテラノザウルスじゃあるまい
海を泳ぐイルカの仲間かもしれない
今生きている人間は誰もみな祖先がある
それは遠ーい遠ーい昔
海を泳ぐ魚だったのだろう
海に泳ぐ小さな生物だったのだろう
人間の祖先はみな海のさざ波が子守唄
だから
人と人が争う理由はどこにもない
命が終わればみな海に帰るのだから

冬のジャスミン

冬に咲くはずもないのに
ジャスミンの白い花に会いたい
あの優しい香りがとても恋しい
冬に咲くはずもないのに
ひまわりの花に会いたい
真っ青な夏の空に浮かぶ黄色い花がとても恋しい
冬に咲くはずもないのに
金木犀の花に会いたい
風に漂う花の香りがとても恋しい
もう君に会えないはずなのに
あの頃の君にととても会いたい
季節の中に溶けていた君の笑顔がとても恋しい

泉

たとえ花が枯れても
君への愛は枯れたりはしない
たとえ僕が田舎の隅で乞食になったとしても
君への愛は枯れたりはしない
たとえ君が誰か他の人に心奪われても
君への愛は枯れたりはしない
君への愛は僕という大地の泉
大地がなくなるまで
泉は枯れることはない
大地が乾く日照りでも
大地が凍る寒い朝でも
泉はいつも湧いている

愛が空から降ってくる

君から電話があった日
空から愛が降ってくる
君からメールが届いた日
空から愛が降ってくる
君の優しさを感じる日
空から愛が降ってくる
君の笑顔に会える日
空から愛が降ってくる
雨の日も雪の日も
嵐の日にも陽照りの日にも
愛は空から降ってくる

坂

坂を上れば風が吹く
沈丁花の花咲く坂道
坂を上れば風が吹く
早春の冷たい北風
坂を上れば風が吹く
ふるさとの便りが見える
花匂う 小さな坂道

山の風

夜

遠く車の走る音が聞こえる

ふるさとの山に吹く風に似た

ゴー、ゴー

ビュー、ビュー

ゴー、ー

ふるさとの山に風は今でも吹いているのだろう

小さな居間で風の音を聞きながら

父母はテレビを見ているのだろう

僕が生まれる前から吹いている

山の風

僕が父母の歳になっても

風は吹いているのだろうか

僕が父母の歳になったら

僕はどこで何をしているのだろうか

風に乗ってこの星を離れているかもしれない

夜

遠く車の走る音が山の風に聞こえる

ふるさとの山の風に

雲

おーい おーい
どこから生まれてきたの
つばめの雛の口の中から
めだかの小さな目の中から
かえるの手の指先から
おーい 雲やーい
どこへ飛んでいくの
南の島のパパイヤの木の上に
砂漠を歩く駱駝の上に
雪の上をそりですべる少年の上に
おーい 雲やーい
僕も連れてって
その柔らかい背中に乗せたよ
綿菓子のように甘くても
食べたりしないから

くちなしの花

雲より白く
雪より白く
綿より白く
画用紙より白い
くちなしの花
この世で一番白い花
白い花なのに
淡いブルーな香り
空に染まらず
風に染まらず
雨に染まらず
人に染まらず
君の色をした画用紙があっても
僕には何も描けない
君の白さに触れられないから

会いたくて

君に会いたくて
君を抱きしめたくて
君の笑顔を思い出し
とっても君に触れたいのに
君は鳥のようで
どこの空を飛んでいるのか分からない
追いかけて
心臓がやぶれるまで
追いかけて
血をはいて倒れるまで
いつか海に突き当たって
君は海の向こうに飛んでいくだろうけど
僕はただ海の底に沈むだけ
君の愛が欲しい
僕の背中に翼が生え
君の空に飛んでいけるから

海へ

風が吹く
遠く街の向こうから
潮の香りを含んで
僕の心を空に飛ばす
海に会いたい
青い海に
海に会いたい
ふるさとの海に
海に会いたい
愛しい君に会うように
いつか君と空を飛んで
夢を探しに海に会いに行きたい
風が吹く
古びた新聞紙を巻き上げ
潮の香りを含んで
僕の心を海へと飛ばす

木が泣いている

数百年と生きてきた木が
今
マンションを建てるために切られ
死んでいく
木は悲鳴をあげない
愚痴を言わない
何も喋らない
木が泣いている
何も言わず 泣いている
人間が汚した空気をきれいにしてきた木
数十年しか生きない人間が
数百年生きて空気をきれいにしてきた木を
平気で殺す
何かが間違っている
人間は罪を犯し続けていく
かわいそうな木
かわいそうな地球
地球の悲劇は
人間の誕生した時から始まった
とりかえしのつかない悲劇
あわれな地球
人間のおかげで
君は老けていくばかり

わすれな草

小さくて
海の色より優しい
わすれな草
ひまわりよりもずっと無口で
フリージアよりも
つつましやかな花
君に思いを寄せても
小指の先より小さい君は
ただすまして咲いているだけ
誰が名付けたかわすれな草
忘れられない花は
いつもとっても小さな花姿
もしも君が
金木犀のような甘い香りを放っていたら
僕は君にまっすぐに恋をして
気が狂ってしまうかもしれない

面影橋

神田川の川底は浅く
水はおだやかに流れる
川沿いの桜の葉は色付き
都電がレールをきしませて走りゆく
面影橋はなんの華やかさもない小さな橋
ただその名前だけが心にしみ込む
夕暮れにひとり欄干にもたれると
冷たい風が心を吹き抜ける
愛する人に会えないさびしさを残して

坂が上れない

鳥は歌をさえずり
水色の風が僕の体をつつんでいく
少し空気の抜けたタイヤと
壊れてがたつくサドルの自転車で
僕は朝の光の中
坂道を下って行く
水色の風は僕の心をオレンジ色に変えて
このまま両手を広げれば空へ飛べるかもしれない
けれど下り坂はつきて
いつのまにか上り坂
少し空気の抜けたタイヤと
壊れたサドルの自転車
僕は必死にペダルをこぐけど
息が切れ 坂が上れない
坂の上を見上げると
それは爽やかな青空
けれど僕の自転車は動かない
自転車では坂は上れない
歩いてしか上れない

僕は忘れない

僕は忘れない

あの明るい陽差しのような

君の笑顔を

暗い雲で陽が陰っても

僕は忘れない

あの明るい陽差しのような笑顔を

僕は忘れない

あの星のような君の瞳の輝きを

いつのまにか雲がわいて

星が見えなくなってしまうても

僕は忘れない

あの星のような君の瞳を

僕は忘れない

あの愁いに沈んだ

君の横顔を

春の月のように愛しい君の横顔

僕はいつまでも忘れない

人生の消しゴム

君が憎くて
君のことを消しゴムで
心の中から消してしまいたいと思うことがあるけど
でも君は僕の心の一部になってしまったから
君への愛を僕の心に縫い付けてしまったから
もし人生の消しゴムで
僕の心から君が消えてしまったら
その時は僕も君の後を追って消えてしまうから

さくら貝によせて

ぼくの熱い血潮をうすめたら
さくら貝の色になるだろう
君のやさしい唇の色になるだろう
君の心の色になるだろう
君にさくら貝を贈る
うすめられないぼくの心を入れて

愛ちゃん

君の前歯は桜の花びら
笑うと桜の花びら
大人になっても桜の花びら
お母さんになっても桜の花びら
本当にいつも
君の笑顔の前歯は
かわいい桜の花びら

あほう

雲のようにあほう
風のようにあほう
満月のようにあほう
瞬く星のようにあほう
あくびをする猫のようにあほう
水たまりの水を飲む鳩のようにあほう
砂糖に群がる蟻のようにあほう
あほうになりたい
ただ時の風に吹かれ
花の散るのを眺めている
あほうな鳥になって
空を飛ぶのを
夢見たい

すべては海色に

汚れちゃった悲しみは すべて海色に
雨にも負けて すべては海色に
じっと手を見つめ すべては海色に
母を背負い すべては海色に
ふるさと思えば すべては海色に
命短し すべては海色に
夏休みのような人生 すべては海色に
僕の思い 君の思い 鳥の思い
魚の思い 雲の思い 風の思い
すべては海色に
愛もやがて すべては海色に

びわの花

陽の差さない曇り日
緑深い山奥に
びわの花が咲いている
甘く神秘的な香り
いつか黄金の果実が実る頃
空は晴れて
白い雲が流れるだろう
けれど今は
この花の香りに酔って
青深い時の中に
身を沈めよう

花梨

ぼた、ぼた、ぼたと落ちていく
黄色く色付いた
甘い香りの花梨の実
拾われず
振り向かれず
食べられない
花梨の実
春の終わりに
花が咲き
秋の終わりに
実をつける
ぼた、ぼた、ぼた
花梨の実
黙って静かに落ちていく

ゆれるプール

海にあこがれても
海にはなれず
空を映しても
空にはなれず
夏の終わり
誰もいないプールは
静かに静かにゆれている

夏祭り

ひぐらしの鳴き声を聞かず
今年も夏が去っていく
祭りが終わり
君の踊る姿が目には浮かぶ
闇夜の中から現れた
君の美しい姿
にぎやかな鉦と太鼓と笛の音の中
君の踊る細い後ろ姿
しなやかに動く白い指先
星が小さく見える
やさしい夜空
君の踊る姿が
とてもなつかしい

あと何回？

都会の汚れた喧噪の中で

ふと見上げると

高い空

青い空

星の瞬く宇宙の下

僕たちはちっぽけな生き物

その生き物のまわり

いつのまに咲いた

沈丁花の花が香る

あと何回？

沈丁花の香りに会えるのだろう

あと何回？

桜に会えるのだろう

あと何回？

ひまわりの風に会えるのだろう

あと何回？

コスモスに会えるのだろう

あと何回？

金木犀の花に酔うのだろう

あと何回？

人を好きになるのだろう

あと何回？

詩が書けるのだろう

砂漠の兵士

砂にまみれ
汗にまみれ
敵に銃を向ける砂漠の兵士
君は知っているの？
人には愛する心があることを
人には熱い血が流れていることを
君にも熱い血が流れているかぎり
人を殺す権利はどこにもない
どうして君は
緑豊かなふるさとを離れ
遠くアラビアの砂漠の中で
息のつまるような風に吹かれ
銃をかまえているのだろう
平和と正義を置き去りにしてきたことを
心のどこかで分かっているはずなのに

ビーナスはどこに

好きだった人はこの町を離れ
心の湖は霧がかかって見えない
五月だというのに町角のジャスミンはまだつぼみ
人物画の背景は琥珀色
ワンピースの青色はくすんだまま
ビーナスはどこに行ったのだろう
季節は変わり
春の憂いはとっくに去っていったのに

絵という恋人

湖に沈み
孤独と陰うつな心を
抱きたい
太陽が僕を照らしても
心の中の青い世界を
探したい
絵という恋人
彼女はその中にいるのだから

君のふるさと

桜の花びらが
淡雪のように舞い落ちて
風にゆれるユキヤナギが
手招きをする
坂道を上れば
ポピーの赤い花が
足元に咲いていた
君のふるさととは
美しく静かだった
梢で鶯が鳴いている
遠い昔の思い出が
胸にあふれ出て
風が胸の中に入り込む
君は今
どこでどうしているのだろう
君の生まれ育ったふるさと
春の陽差しの中
美しく静かに横たわっている

南信濃

稲穂が実り頭垂れ
胡桃の実が実る頃
川辺の花麗しく
夏風に甘く漂う
後ろ姿の向日葵うなだれて
野焼きの煙懐かしく
川の水は清く流れる
秋桜の花あでやかに
遠く山影に
夏を惜しむ蝉の声
やがて迎える
盆の夜の
町の花火儂くて
心の中に描く間なし
美しき
虫の音色に振り向けば
蒼き山上に
雲染むるおぼろ月
懐かしき人に会えし
想いわきたつ

風歌 2

<http://p.booklog.jp/book/22328>

著者 : 森下淳一

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/bluebarubora/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/22328>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/22328>